慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	量の範疇に就いて - 機械論並に数理経済学方法論の批判 -
Sub Title	
Author	奥田, 忠雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.11 (1932. 11) ,p.2255(41)- 2290(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19321101-0041
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19321101-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

から更に進んで社會學的經濟學的構成に於ける質の研究へ入らねばならぬ。之れを吾々は次の機會に於いて考察したいと考へる。

量の範疇に就いて

——機械論並に數理經濟學方法論の批判——

奥田忠雄

吾々の感性を通じて直接主觀に與へられる對象の現象形態は單に質的規定性を有すにとゞまらず、同時に量的規定性をもつて現はれる。例へば直接吾々の感性によつてか、乃至は統計表、會社銀行の決算報告書、株式相場表等を見る（感性に訴へる）かによつて、資本主義社會の諸現象は、商品交換の量的增加、勞働者階級の遞增、資本蓄積の異常な膨脹、流動資本に對する固定資本部分の增加、利潤利子の低下、獨占の擴大、恐慌と不景氣期間の延長、失業者群の增大等々の量的規定性を有することを知覺す。

勿論これ等の量的規定性は、吾々の感性を通じて初めて知り得るものであるとは云へ、決して觀念論者や不可知論者の說く如く、單に純然たる主觀の創造物、主觀的範疇にとゞまるのではなく、それは對象たる客觀的實在そのものの一面を現はし、主觀はこの客觀的規定を反映して量なる範疇を設定するのである。何となれば、右に揭げた資本主義社會の量的規定性は、吾々主觀がそれを認識すると否とに拘らず、儼然と客觀的に實在し、吾々の生活はその客觀的關係の內に必然的に織り込まれざるを得ないからである。即ち量の範疇は客觀的實在の一規定を反映する。

ところで量の範疇は、既に述べた如く、質の範疇に比べて、論理上「外的な、重要ならざる規定性」である。と云ふのは、一定の對象はその質を失へば最早それがあるところのものたることを失ふのであり、即ち質は對象の本源的な「直接的規定性」たるに反し、對象の量の增減は直接に對象そのものを變化せしめないからである。「例へば畑がその量的限界を變ずる場合、畑は依然として元のまゝの畑として停まつてゐる。これに反して質的限界が變ずる時は、畑を畑たらしめる所の規定性が變り、畑は野、森等となる。」（Hegel, Wissenschaft der Logik. Bd. I. in: Vollständige Ausgabe. Bd. 3. S. 210. 邦譯、岩波ヘーゲル全集、六卷、三〇三頁）

然し量の範疇が「外的な重要ならざる規定性」の故を以つて、對象の量的方面の觀察を輕視し、又は看過してはならぬ。と云ふのは、第一に凡ゆる對象は量的規定性を有し、且つ對象の種類を異にするに連れて量的規定性の重要さには相違があるとは云へ、或る對象に至つてはその量的規定性を缺いては何等その對象を認識し得ないからである。故にヘーゲルも次の如く述べてゐる。「量の規定を單に外的な重要ならざる規定なりと指摘することによつて、良心が怠慢と皮相になり、また量的規定をそのまゝに放置し、若くは少くともそれを同じく正確に解する必要なしと主張する、かに誤解される。量は……對象界に於て、即ち自然及び精神界に於て、それの權利を得ねばならぬ。然し乍らその場合また直ちに、量的規定が自然界の諸對象に於けると精神界の諸對象に於けるとで同等の重要性を有さないと云ふ區別が明かになる。即ち……自然に於ては、……量と雖も精神界、即ち自由なる內面性の世界に於けるよりも一層大なる重要性を持つ。吾々は精神的內容をも量の見地から考察しないではない、たゞ然しその場合には次のことが明かである、吾々が三位一體的なるものとして考察するとき、この三と云ふ數は、例へば空間の三次元、更には三角形の三邊を考察するときに比して遙に從屬的意味しか有さない、後者の根本規定は正に三邊によつて圍まれた平面であると云ふだけの規定である。更にまた自然の範圍內に於てさへ、量規定の重要性に大小の區別が見出される、即ち非有機的自然に於ては有機的自然に比して量が云はゞ一層重要な役目をなしてゐる。そして更に吾々は非有機的自然の範圍內に於て尙ほ力學的領域と狹義の物理的並に化學的領域と區別するから、こゝに於て再び同樣の區別が現はれる、そして力學が數學の助けを最も必要とする科學であることは一般に認められてゐる、否な、それに於ては數學なくしては殆んど何等の進步もされ得ない、またその爲に力學は數學に次いで特に正確科學と考へられるのが普通である」と。（Encyclopädie. in: Vollständige Ausgabe. Bd. 6. S. 199-200. 速水氏譯「ヘーゲル哲體系」二四八―二五〇頁）

對象の量的方面の觀察を輕視してはならぬ第二の理由は、對象の量的變化は直ちに對象そのもの、從つて對象の「直接的規定性」なる質の變化を實現しないとは云へ、量の變化は既に對象變化の可能性を含んで居るからである。この點は次の「質量」の範疇を取扱ふ際、「量の質への移行」の問題として詳細に論ずる豫定である。今簡單にこれを述べるならば、量の變化が對象そのものを變化せしめないのは、一定の限界內に於てゞあつて、一定の限界を越へる時は對象そのものを變化せしむるに至るのである。さればヘーゲルも、量の範疇が質の範疇に比べて、直接對象（註、有）を變化せしめざることを指摘するに際しても尙ほ「それ（量）は有の本性たる變易性を包含してゐるが」（Wissenschaft der Logik. Bd. I. S. 75. 邦譯九九頁）なる但書を附して居る。即ち辯證法の基本的要求に從ひ、對象を運動、變化過程に於て把へんとする限り、常に對象の量的規定性の變化に注意す可きである。

斯かる理由よりして對象の量的方面を觀察するに當つても、常にその對象の質的方面を同時に顧慮しなければならぬ。何となれば、本來客觀的實在に於ては質と量とが統一されて居り、且つ量は質によつて規定されてゐるから

である。即ち第一に、全く異つた運動形態にある對象、從つて全く異つた質を持つ對象は、夫々異つた特定の量的規定性を有す。（註）例へば液體は升、リットル、固體は貫、ポンド等の夫々異つた量的規定性によつて量られる。

（註）吾々唯物論者は、認識の對象が客觀的實在（物質）であり、且つそれは常に一定の運動形態に於てのみ存することを認める以上、直接吾々の感性に與へられるものは質一般（純粹有）ではなく、一定の質（定有）であり、又量も量一般（純量）ではなく、一定の質によつて規定された一定の量（定量）であり、從つて吾々が量を思惟する場合定量の範疇から出發するより外に途はない。然るにヘーゲルは、彼の客觀的觀念論の體系を維持せんが爲に、丁度質の範疇を取扱ふ際に「純粹有」から出發し、それから「定有」を導出した如く、量の範疇を取扱ふ際にも、「純量」（Die reine Quantität）から出發し、それから「定量」（Quantum）を導出してゐる。斯かる導出は、明かに純粹思惟から一定の質、量をもつ所の物質を生み出すことであり、神秘的である。唯物論者である限り、常に「定量」の範疇から思惟を始む可きである。

第二に、假令へ同一の運動形態にある對象にしても、尙ほその運動過程の各發展段階を異にするに連れて、その發展段階特有の質によつて規定された特定の量的規定性を有す。例へば、同じ社會の生產力にしても、社會の各發展段階を異にするに連れて、その量的規定性も異なれば、又量的發展のテンポも異なる。即ち資本主義的生產は利潤を目當とするものなるが故に、斯かる質によつて規定された生產力は利潤率なる特定の量的規定性によつて量られ、これに反し社會主義的生產は直接大衆の消費を目的として行はるゝが故に、斯かる質によつて規定された生產力は生產財貨なる特定の量的規定性によつて量られる。又生產力の量的發展のテンポにしても、勿論資本主義社會は、田園に於ける自然經濟と都市に於けるギルド的手工業なる特定の質によつて規定された封建社會の生產力に比べ、自由競爭とマニュファクチュア更には機械生產なる質によつて規定されて居つた結果、その生產力の發展のテンポは異常なものであつたとは云へ、然し資本主義社會は元來生產の社會的性質と占有の個人的性質なる矛盾した根本的質によつて規定されて居るが爲に、周期的產業恐慌を惹起し、恐慌は機械の操業時間を短縮せしめ、勞働能力と勞働意志とを有する者を職場より驅逐する等々のことを惹起し、可能なる生產力の發展を阻害する。これに反し、この資本主義の根本的矛盾を排除する所の社會主義社會に於ては、最早右の事情に由來する限りに於ける生產力發展の阻害は廢棄され、從つて生產力の發展のテンポは資本主義のそれとは異なつて現はれる。即ち最近資本主義諸國が永續的な不景氣と更に不景氣後に於ける恐慌なる一般的危機に曝され、異常な生產力の沈退を來して居る際に、獨りソヴェート露西亞に於ける第一次五ケ年計畫の成功は、假へその宣傳を割引して見ても、尙ほ資本主義社會とは異つた生產力の發展のテンポを有することを事實證明してゐる。

斯くの如く、量は對象の特定の質によつて規定された特定の量的規定性としてのみ存するが故に、對象の量的規定性を觀察する際、その對象に特有な一定の量的規定性に注意す可きである。

さて對象の量的方面を研究するに際しては、常にその質的方面と不可分の聯結に於て觀察してのみ、その對象そのものゝ量を、即ち現實の量を認識し得るに拘らず、往々にして對象を專ら量的にのみ取扱はんとする傾向が存す。斯かる傾向は、主として、對象を量、特に數量に於て計算し得る場合最も認識は正確なるを得との思想に由來する。されば普通に數學（註一）を以つて最も正確な科學と看做す。數學に次いでは力學であるとする。と云ふのは、力學は物體の位置變化を純數量的に研究するものだからである。それ故凡ゆる科學を正確ならしめんとし、對象を純數量的に取扱ひ、諸對象の質的差異を抹殺せんとする要求を持つ。即ち凡ゆる質的に異つた對象は本質に於ては

同一の極微分子からなつて居り、單に極微分子の數量の相違と、それ等が結合する際の位置變化なる力學的運動によつて表面上質的差異が生ずるとなす。斯かる立場は凡ゆる質的變化を量的な力學的運動に還元せんとするものであり、且つ力學は獨乙語で Mechanik であるからして、それは「機械論的」（mechanische）（註二）と呼ばる。されば エンゲルスは次の如く述べてゐる。「それ（機械論）は、一切の變化を位置の變化から說明し、一切の質的相異を量的相違から說明する。……若し質の凡ゆる相異と變化とが、量の相違と變化とに、即ち力學的位置の變化に還元さるべきものとするなら、吾々は必然的に次の如き命題に到達する――一切の物質は同一の極微分子より成り、物質の化學的諸元素の總ての質的相異は、この極微分子の數と、それが結合して原子を構成する際の排列上に於ける量的相異との結果として現はれると。」（Dialektik und Natur. in: Marx-Engels Archiv. Bd. II. S. 232. 邦譯、マルクス、エンゲルス全集、十四卷一〇八頁）古代に於ては既に數を以つて事物の本質と看たるピタゴラスの哲學はこの立場にあるし、近世に於ては十八世紀佛蘭西の機械論的唯物論がさうであつた。更にカントは、勿論右の形而上學的機械論の立場を取らなかつたとは云へ、尙ほ「學問はその內に數學を含む限り眞の科學なり」と主張する限り、多分に機械論的傾向を帶び、この傾向は新カント派中マールブルヒ學派の者によつて發展され、その影響の下に機械論的立場を自然科學にとゞまらず、社會科學に迄擴大せんとする傾向をさへ生じたのである。（例、マールブルヒ學派とカッセル、シュムペーターの機械論的、數學的經濟學との關係）

（註一）數學は、普通には、純粹に量を取扱ふ科學であるとされて居る。然しその取扱ふ數でさへ、既に多くの質的差異が附着して居ることをエンゲルスは指摘して居る。「數は、吾々が知れるものの中で最も純粹な量的規定である。然しながら、それには質的差異がいつぱい附着してゐる。一、ヘーゲル、多と一、乘法、除法、自乘、開方。これらによつて既に、ヘーゲルの場合には出て來ないところだが、素數及び積、素羃根及び乘羃の如き質的差別が、生れてくる。十六は單に一を十六個加へたものであるのみならず、それはまた四の自乘、二の四乘である。それどころではない。素數は他の數との乘法によつて、その素數から導き出された數に、新な確定的な質を分與する、即ち偶數のみが二によつて割り切れる、同樣の規定は四や八に對しても妥當する。……數學が無限大及び無限小について論じるやうになるや否や、それは質的差別を持ち込む、この差別は橋渡しのできない質的對立としてすら現はれる。諸々の量でも、相互に法外に甚しく掛けちがつてゐると、その間に於ける如何なる合理的な割合、如何なる比較も止み、それらの量は通約すべからざるものとなる。圓と直線との例の非通約性は、やはりまた一個の辯證法的質的差別である」と。（Engels, Dialektik und Natur. in: Marx-Engels Archiv, Bd. II. S. 203-204. 邦譯、マルクス、エンゲルス全集、十四卷、七五頁）

（註二）廣義に於て機械論とは目的原因或は目的觀念を排して盲目的に必然的な原因結果の關係に從つて對象を研究する立場を云ふ。然し吾々はこれを狹義に解し、對象の變化を力學的に說明せんとする立場に限る。機械論と目的論との辯證法的統一に就ては他日本質論に於て論ずる。

機械論的傾向は單にブルジョア哲學の陣營內に於て見出されるばかりでなく、唯物辯證法の哲學を建設せんとするマルクス主義者の陣營內にもこれを見出し得るのである。と云ふのは、既にヘーゲルも唯物論と機械論とを同一視する（Vgl. Encyclopädie. § 99. Zusatz. 邦譯、二四八頁）に至つた程、從來唯物論と機械論とは密接な關係を以つて發達して來た結果、往々にして唯物辯證法を機械論と混同し乃至は機械論的に修正さへせんとする傾向を生じたのである。然し本來の唯物論と機械論とが同一でないことは、自然界に於ける機械論の妥當を承認したデカルト、スピノーザ、ライプニッツ、カントは觀念論乃至不可知論者であり、十八世紀佛蘭西の機械論的唯物論者は「上の

方で、即ち社會科學の領域に於て觀念論を固執し」（Lenin, Sämtliche Werke. Bd. XIII. S. 239）たし、又機械論的自然科學者が屢〻觀念論、信仰主義へ轉落した事實からでも明かである。（Vgl. Ebenda. Kapitel V）然るにも拘らず、ソヴェート哲學戰線に於て、ボグダーノフ、ステパーノフ、アクセリロード、ブハリン、サラビヤノフ、ペロフ、ヴアリヤシ、チミリヤゼフ等による機械論的修正が現はれたのである。そしてステパーノフ對ステンの論爭に端を發し、一九二四年から二九年の永きに亘つて行れた機械論者と辯證法論者との論爭は、機械論者の決定的な敗北を以つて終つたのである。それ故、この問題は既に今日のソヴェート哲學戰線に於ては第二義的の意味を有するに過ぬ。そして三〇年以後に於けるその主要任務は、唯物辯證法の凡ゆる個々の科學的領域への適用と、社會主義建設の實踐的問題への進出とである。

だが茲に機械論者の主要缺陷を指摘して置くことは、尙ほ唯物辯證法の機械論的誤解が一般に行はれてゐる吾國の現情と更には經濟學に於ける機械論的傾向が尙ほ優勢なるとに鑑みて、あながち無駄なことではないと思ふ。繰返し機械論者の修正の基本的諸命題を簡單に總計し、表示するならば、

1、凡ゆる物質の運動形態、即ち自然（物理、化學、生物學的現象）、社會、思惟等の運動形態を力學的運動形態、空間に於ける物質の位置變化と同一視す。

2、各運動形態に於ける物質の質的差異を純量的差異に、即ち全然一樣な微分子の量的結合に還元す。

斯かる立場よりする當然の歸結として、

第一、抽象的一面的認識に墜入る。と云ふのは、客觀的實在は常に質と量との統一であり、特定の質によつて規定された特定の量的規定性のみが存するに拘らず、その對象の質的規定性を抹殺し、專ら純量的に對象を觀察するならば、當然一定の對象そのもの、即ち現實の具體的認識には達し得ない。ヘーゲルの用語を以つてすれば、量の一面にのみ固執する抽象的な悟性的認識、即ち非辯證法的な認識に墜入る。されば既にヘーゲルも、對象の數量的研究を以つて精密なりとする結果、量の一面に固執するの危險に對し、次の如く注意して居る。「こゝに於ても再び上に述べたところの、具體的理念（註、認識乃至眞理）の替りに一面的にして且つ抽象的な諸悟性規定を置く惡しき形而上學が現れてゐる。……孰れにしてもよくみれば、ここに述べられた全く數學的な立場は量、即ち論理的理念のこの一定の段階（註、多樣な規定の統一たる具體的眞理の單に一規定）が理念（註、具體的眞理）そのものと同一にされる立場であつて、これ全く唯物論（註、唯物論ではなく機械論だ）の立場に外ならぬ、そしてかゝるものは學的意識の歷史に於いては佛蘭西で十八世紀の半ば以來その全き承認を見出したのである。」（Encyclopädie. § 99. Zusatz. S. 199. 邦譯、二四八頁）「ともあれ、こゝに述べた凡ての點よりして、屢々なされるが如き對象的なものゝ一切の區別と一切の規定性とが單に量的なものゝ內に求められるとき、それは正に精密な竝に根本的な認識に對して最も惡しき偏見の一つとして指摘されねばならぬ。云ふまでもなく、精神は自然以上のものであり、動物は植物以上のものである、併し單にかゝる以上とか以下と云ふことを以つて滿足して、諸對象をその特有の、こゝでは先づ質的な規定性に於て把握するまで進行かないならば、諸對象及びその區別に關して知られるところ極く僅少である。」（Ebenda. S. 200. 邦譯、二五〇頁）

第二、主觀的な勝手氣儘な認識をなすに至る。一定の質によつて規定された特定の量的規定性、即ち一定の客觀的實在そのものを問題とせず、單に對象を純量的に取扱ふ結果、往々にして純演繹的な數學的方法に從つて、主觀的な勝手氣儘な數量の遊戲が始まる。ヘーゲルも云ふ如く、「一定の數を根柢とする諸現象を再び數の上に還元せん

とすることは、既に決定的な學的關心であるにしても、思想（註、對象たる客觀的實在）一般の規定性を單に數學的規定性と解することは如何なる仕方でしても許されない。かゝる仕方ですれば、最も普遍的な思想（註、客觀的實在の）規定が第一の數と結びつけられ、從つて、一は單純にして直接的なもの、二は區別と媒介、三は兩者の統一と云はれる機因となるのが見られよう。然しこれらの結合は全く外的であり、そして所謂數そのものゝ内にはこの一定の思想（註、客觀的實在）の表現たるものが存しない。ともあれ、かゝる仕方で進めば進む程、一定の數と一定の思想（註、對象たる客觀的實在）とを結合するに單に勝手氣儘を以つてすることが現れる。例へば四は一と三との統一竝びに兩者を結合した思想（註、客觀的實在）と考へられよう、だが四は又同じく二の二倍でもある、同樣に九は單に三の三倍であるのみならず、八と一、七と二、等々の總和でもある。……だが哲學に於ては、人が或ことを思惟し得るといふことは問題でなく、寧ろ現實に思惟することこそ肝要なのである。思惟（註、客觀的實在）の眞實の要素は勝手に選ばれた象徴でなく、ひとへに思惟そのものに於て（註、對象そのものに於て）探究することである。」（Encyclopädie. §. 104. Zusatz. 3. S. 212. 邦譯、二六四頁）斯かる危險は、後に述ぶる如く、經濟學に於ては特に數理經濟學派の方法論に現はれ來るのである。

第三、「抽象から具體への向上」ではなく、「複雜なものを簡單なものに還元せんとする」所の非科學的な、非辯證法的な方法を採用す。例へばブルジョア社會學者スペンサーに倣つて、ボグダノフは社會現象を生物學的現象に還元されるとなし、更に生物學的現象を化學的現象に、化學的現象を物理的及び力學的現象に還元或は同一視されるとなす。又ブハリンは「史的唯物論」の中で、力學的現象と「有機的現象とを對立させることは……意味がなくなつたゝと絶叫してゐる。然しマルクス、エンゲルス及びレーニンは力學的運動と物理學的、化學的、生物學的運動との質的差異を明瞭に指摘して居るし、（Vgl. Engels, Dialektik und Natur. in: Marx-Engels Archiv. Bd. II. S. 230 ff. 邦譯、マルクス、エンゲルス全集、一四卷、一六〇頁以下參照）更に生物學的法則と社會法則を同一視する學者を容赦なく批判し、（Vgl. Lenin, Sämtliche Werke. Bd. XIII. S. 377 ff. 邦譯、山川、大森譯「唯物論と經驗批判論」五三八頁以下參照）、又例へば資本主義の發達法則と他の社會形態の發達法則との間の質的差異を見ないやうな學者を痛論してゐる。

第四、質の客觀性を否定し、主觀的觀念論乃至不可知的論へ轉落す。と云ふのは、機械論者は凡ゆる物質の質的差異を極微分子の純量的差異に還元するからして、彼等は質を以つて、單に主觀の感覺の創造物とみる（主觀的觀念論）か、乃至は客觀的實在の質は不可知であり、質は單に主觀の思惟形式に過ぬとなす。例へば、ステパーノフは「存在が今以て尚ほ我々の認識（私は知覺のことを云ふのではない、多質性がないと云ふことは、知覺にとつては死滅を意味する）にとつて依然として多質的であると云ふ事實、色々な質の量的研究がまだ充分には進んでゐないと云ふ事實は、我が懷しき批判者諸君、諸君が想像するやうに、科學の進歩を證明せず、科學がまだ極めて若いことを立證するものである」と云つてゐる。又アクセリロドやサラビヤノフは、プレハノフの不可知論的象形文字論、即ち吾々の概念、感覺は對象そのものゝ模寫、反映ではなく、單に「象徴」、條件つきの記號、象形文字にすぎぬとの立場に立つて、質をば率直に主觀的範疇であると云つて居る。

第五、「量から質への轉化及びその逆の法則」を否定することになる。何故ならば、機械論者は質的差異の客觀性を否定する以上、「量から質への轉化」は最早あり得ないからである。（この點は次の節に述ぶ）

第六、飛躍、革命、漸進的發展の中絶なる辯證法的發展理論を否定し、平凡な改良主義的進化論に墜入る。これ

は第五の問題と直接關聯して居るのであり、從つて次節に詳論するが、この際簡單に述べるならば、本來對象は質量の統一であり、一定の質を有する對象の內部に於ける量の漸次的變化は或る一定點に達する迄は何等對象の質を變化せしめないが、その一定限界に達するや、漸次的發展は中絕され、飛躍的に對象の質に變化が生じ、それと同時にこの新な質によつて規定された新たな量的規定性が生ずるのである。然るに對象の質の客觀性を否定する時は、單に漸次的な量の變化のみが認められ、そこには何等の發展も、何等の新たなるものゝ發生もなく、たゞ減少乃至增大した形に於ての舊いものゝ繰り返しがあるに過ぎぬやうな發展を知るのみである。レーニンの言葉を借りて云へば、「乾枯びた、貧弱な、死んだ」發展理論に墜入るのであり、又それは量の漸次的變化のみを認め、飛躍、革命を否定するが故に改良主義、日和見主義的發展理論となる。

第七、物質の自己運動の原理としての「對立物の統一」を內的矛盾と解さず、外的矛盾、衝突と誤解す。蓋し機械論者は凡ゆる運動を力學運動に還元するのであり、且つ力學的運動は一、原因の外部的性質と二、原因及び作用の純量的同一性とを特徵とする。例へば、一つの球が他の球を突く。突いた方の一つの球は他の球を運動させて停止する。第一の球は他の球が得たゞけの運動を失ふ。原因と作用は同一であり、こゝでは力の量の方面からのみ見られる。第二の球の運動の原因はその外部に存する。これは第二の球に對して外部的な原因である。ところで、若し第一の球が外部から第二の球に作用する力と、第二の球自身が持つてゐる力とが方向に於て全く對立し、且つ量的に同一であるならば、兩者は均衡を保つであらう。

それ故、例へば機械論者ブハリンは、均衡の多少とも正確な概念は次の如きものであると。「或る體制が均衡の狀態にあるといふのは、その體制が外部からそれに加へられるエネルギーなしに、勝手に、與へられた狀態を變へ得ない場合である。例へば、或る物體に相殺する諸力が加へられるならば、その物體は均衡の狀態にある。若しこれらの諸力の一つが減るか增すかすれば、その時均衡は攪亂されるであらう。」と。（N. Bucharin, Theorie des historischen Materialismus. Hamburg, 1922. S. 74-75. 直井武夫譯、「史的唯物論」同人社、一〇九頁）更にブハリンは、「マルクスの謂ゆる「神秘的な」ヘーゲル辯證法の用語を、現代力學の用語に飜譯することが全く可能であると考へ」（Ebenda. S. 76. 同書一一二頁）、その力學的均衡を化學的運動、生物學的運動、更には社會的運動の原理――史的唯物論――に迄擴大せんとする。即ち「吾々は任意の事物を――それが石であらうが、生物であらうが、人間社會であらうが、その他の何物であらうが――相互に聯關された部分（要素）から成る全體的な或るものとして觀察することが出來る、換言すれば、吾々はこれを體制として觀察することが出來る。すべて斯かる事物（體制）……は自然の他の諸要素によつて、それに對して環境と呼ばれるものによつて、取圍まれてゐる。……人間社會にとつては外的自然が環境である。環境と體制との間には不斷の聯關が存する、即ち環境は體制に作用し、今度は體制が環境に作用する。」と。（Ebenda. S. 76-77. 同書、一一二頁）この體制とその外部に存する環境との聯關に就いて、彼は三つの均衡狀態を擧ぐ。第一は安定的均衡であり、第二はプラスの記號を持つ可動的均衡（體制の發展）であり、第三はマイナスの記號を持つ可動的均衡（體制の崩壞）である。第一の均衡は「環境と體制との間の矛盾が絕えず同一の量的相互關係の內に再生產される」（Ebenda. S. 77. 同書、一一三頁）場合であつて、例へば「社會が消費するだけのエネルギーを生產によつて自然から吸出すならば、社會と自然との間の矛盾も元通りの形態に於て再生產され、社會は同じ場所に足踏みするだけである。」（Ebenda. S. 78. 同書、一一三―一四頁）第二は「社會と自然との間の關係が、社會が生產によつて消費するよりも多くのエネルギーを自然から吸出すやうに變化する」（Ebenda. S. 78. 同

書、一一四頁）場合であり、第三は「社會がますます多くを消費して、いよいよ少く獲得することを余儀なくされるやうな方向に變化する」（Ebenda. S. 79. 同書、一一五頁）場合である。彼は、この環境と體制との間の矛盾、即ち「外的矛盾」に次いで、體制自體（例、社會自體）の內部に於ける內的矛盾を論じ、そしてこの兩者のうち、內的矛盾がではなく、外的矛盾が根本に於て均衡を破壞し、運動を惹起すとなす。即ち「吾々は、矛盾には二樣の種類があることと、即ち環境と體制との間の矛盾と、體制自體の諸要素の間の矛盾とがあることを見た。これらの二種の現象の間には何かの聯關があるであらうか？　さうだ、さういふ聯關が存在する、と肯定的に答へる爲には、少しばかりこれらの問題に就いて考へれば充分だ。（余り少しすぎやしないか？筆者）何故なら、體制の內部的構成（內的均衡）は、この體制と環境との間に存する關係（註外的均衡）に依存して變化せねばならぬことは、全く明白であるから。體制と環境との間の關係は決定的な大さである。何故なら、體制の凡ゆる狀態、その運動の基礎的形態は、正にこれらの關係によつて決定せられるからである。」と。（Ebenda. S. 80-81. 同書、一一七頁）そして最後にブハリンは、自身傍點を附して、次のやうに書いてゐる。「從つて、內的均衡は外的均衡に依存するところの大さである（この外的均衡の「機能」である）」と。

斯かる立場からしては次の如き矛盾が生ず。第一に、物質の自己運動を否定して、客觀的觀念論、坊主主義に墜入る。と云ふのは、運動の基本形態を、外的矛盾、外的刺戟による均衡の破壞なる力學的運動に求める以上、凡ゆる物質が運動するのは、その物質の內部に對立、矛盾した契機が統一されて居るが爲に自己運動を起すよりも、寧ろ根本に於ては、物質の外部からの刺戟によつて運動を起すと主張するのであり、結局最初に於て物質に刺戟を與へる何等かのもの、即ち神の如きものを認めざるを得なくなるからである。第二に、史的唯物論を地理主義的社會學に僞造す。と云ふのは、社會發展の根本的推進力を社會の內部的矛盾よりは、寧ろ環境、特に地理的環境との外部的矛盾に求めるに至るからである。然しこれに反し、對立物の統一なる辯證法の法則は自然、社會及び思惟に於ける發展の基本的法則として研究する。勿論凡ゆる物質は自己運動する故、相互に接觸し、外的關聯を生じ、從つて外部的矛盾が生ずることを否定するものではない。然しそれは主要な基本的な矛盾ではない。外部的な矛盾及び外部的な原因の作用は對象の內部的な矛盾及び發展法則の所產である。外部的な原因及び環境の作用の性質は、また發展しつゝある對象それ自身の構造、質によつて規定される。地理的環境か社會の發展に如何に影響するかはその社會の構造及び發展水準によつて規定さる。註

註　更に生產力と生產關係の問題に就いて一言して置く。機械論者によれば、生產力とは技術力（Vgl. Bucharin, Ebenda. S. 131. 同書、一八九頁）、即ち自然力の利用であり、生產關係とは生產に際して結ぶ人間對人間の社會關係であり、從つて生產力と生產關係の矛盾は外的矛盾だと云ふことになる。この外的矛盾によつて社會が發展することになる。且つこの外的矛盾の內、生產力が根本的なものである以上、技術力が社會を動かすと云ふマルクス研究の牧歌時代に逆戻りし、史的唯物論はシュタムラー其他のカント主義者による陳腐な評言の前に光を失つて終ふ。然し生產力と生產關係の矛盾は外的矛盾ではなく、內的矛盾の關係にある。と云ふのは、生產力は技術力そのものではなく、社會力だからである。蓋し生產力とは、自然力の利用としての道具、機械等の生產手段そのものでも、人間の勞働力そのものでもない。生產手段と勞働力とが結合して始めて生產力が生ずるのである。ところで生產手段と勞働力との結合は生產關係なる社會關係の內部に於て始めて實現するのである。例へば、資本主義社會に於ては、生產手段の所有者たる資本家と勞働力の販賣者たる賃銀勞働者とが社會關係即ち生產關係を結べばこそ生產手段と勞働力が結合され、生

産力が實現されるのである。斯かるそれ自體社會力としての生産力のみが現實に歴史を動かす所の生産力であり、史的唯物論に於ける生産力である。それ故、生産力は社會の内容をなし、生産関係は社會の形式をなし、即ち両者は内的矛盾と云ふ意味に於ての對立物の統一である。

第八、偶然性を總て否定し、必然性のみを認める結果、宿命論に墜入り、又却つて必然性を偶然性に引下ぐに至る。蓋し機械論者は外部的な、力學的な原因の他は認めないから、彼等にとつては内部的原因と外部的原因の區別はない。總てのものは外部的原因によつて惹き起され、且つ原因なくして存するものはないから、總てのものは必然性を持つのだと云ふ。例へばエンゲルスの述べる如く、十八世紀フランスの機械論者は斯く云ふ。「このオランダゲンゲの花は今年或る蜜蜂によつて實を結んだが、あのオランダゲンゲはさうではなく、つまりこの特定の蜂により、この特定の時に實を結んだのではないと云ふこと、この特定の吹き散らされたタンポポの實は芽が出たが、あのタンポポの實は芽が出なかつたと云ふこと、昨夜一匹の蚤が私を午前四時に喰つたので、三時でも五時でもなく、更に詳しく云ふと右の肩を喰たので、左の股ではないと云ふこと、總てこれ等は原因と結果との確固たる連鎖によつて、不動の必然性によつて惹き起された諸事實であつて、しかも既に、太陽系が發生したところのガス球體はこれ等の諸結果が斯くの如くに生じて、他樣には生じないに違ひないやうに出來てゐたのである」と。（Dialektik und Natur. in: Marx-Engels Archiv. Bd. II. S. 265. 邦譯「マルクス、エンゲルス全集」、一四卷、一四九頁）斯く總てのことは原因を有すが故に必然的であり、何等原因なくして生ずる所の偶然性なるものは絶對になく、吾々が屢、偶然と呼ぶは、單にその現象の原因を知らないからさう呼ぶだけであると。機械論者ブハリンも、「嚴密に云へば、偶然的な、即ち無原因的な現象は一つもないのである。吾々が現象の原因を充分に知らない限り、それは吾々には偶然的なものと見え得るのである」（Theorie des historischen Materialismus. S. 38. 邦譯、五五頁）と。

斯かる種類の必然性を以てしては、我々はエンゲルスの云ふ如く、「神學的自然觀」（Ebenda. S. 265. 同書、一四九頁）の埒外に出でず、キリスト教徒の「運命」、「神の攝理」觀と何等異ならず、坊主主義的な宿命論に墜入る。従つてブハリン的な必然性、偶然性の解釋は宿命論に通じ、現實に對する能動的、革命的な態度ではなくて、瞑想的日和見的な態度に通じてゐる。

宿命論に墜入るばかりではなく、更に必然性を却つて偶然性に引下げることになる。「或る特定の豌豆の莢が含んでゐる豆は六つであつて五つ或は七つではないといふ事實が、若し太陽系の運動法則やエネルギー轉化の法則と同一段階に立つものとするならば、然らば實のところは偶然性が必然性へ高揚されてゐるのではなく、むしろ必然性が偶然性へ引き下げられてゐるのである。一定の區域に並存せる有機的及び無機的の種や個體の多種多樣性は、犯すべからざる必然性に基づくものとして大いにどのやうにでも主張されるかも知れぬ。だが、個々の種や個體につては、この元のまゝの多種多樣性は依然として偶然的なものである。個々の動物にとつて、それが何處で生れたか、それが生きるために如何なる手段を見出すか、それは如何なる且つ如何に多くの敵に脅かされるか、と云ふことは偶然的なことである。親植物にとつては、風がその種子を何處へ吹き散らすかは、偶然的である。子植物にとつては、それが出て來る所の種子が何處にその發芽する土地を見出すかは偶然的である。そして斯かる場合にも亦一切のものは犯す可らざる必然性に基いてゐると確信することは、下らぬ慰めに過ぎない。一定の領域に於ける、否な更に全地球に於ける自然物の種々雜多な集りは、永劫の昔から原始的に決定されてゐるにも拘らず、而もそれは元のまゝに依然として――偶然的である。」（Engels. Ebenda. S. 266. 同書、一五〇頁）

機械論者と異なり、外部的原因と內部的原因との間に差別を認める場合、吾々は必然性と偶然性とを正しく辯證法的に理解し得るのである。蓋し凡ゆる物質は互に孤立的に發展するのではなく、相互に接觸し、衝突して發展す。それ故各一定の物質はそれ自體の內部的原因によつて發展するばかりでなく、外部からの刺戟、即ち外部的原因によつてその物質が發展する場合、これを必然的と呼ぶ。この內部的原因によつてその物質が發展する際、何時何處で他の物質と接觸し、それ等から外部的原因を受けるかはその特定の物質そのものにとつては全く偶然的である。發展の線の錯綜と橫斷、そこに偶然性の王國がある。例へば、タンポポの種が一定の土壤に落れば、その種の內的本質、屬性により、必然的に花を開き、やがて種子を生み出す。然しその種子が風によつて何時何處に吹き散らされるかはそのタンポポにとつては全く偶然である。勿論機械論者の云ふやうに、無原因な偶然はないのであつて、風は風で又その內的原因により必然性をもつのである。それ故、エンゲルスはヘーゲルの言葉を引用し、「偶然的なものは一つの理由を持つ（註、他の物質、即ち風の中に）、蓋しそれは偶然的であるから。全く同樣に、偶然的なものは又何等の理由をも持たぬ（註、與へられた物質、即ちタンポポの種子の中に）、蓋しそれは偶然的であるから」と述べてゐる。（Engels, Ebenda. S. 266. 同書、一五〇頁）それ故、機械論者の如く一切の原因が必然性で何等偶然性がないのではなく、內部的原因に由來するものが必然的であり、外部的原因に由來するものが偶然的であり、斯く兩者は相異なると同時に、又同一でもある。と云ふのは同一原因が同時にその物質に對しては內部的なるも、他の物質に對しては外部的であるからである。即ち「偶然的なものは必然的である。必然性は自らをば偶然性として規定する。」（Ebenda. S. 266. 同書、一五〇頁）そして偶然性は必然性に轉化さへするのである。例へば、マルクスが資本論に於て述べて居る如く、交換の偶然的形態は一般的な必然的な交換の形態に轉化する。即ち或る原始共產體に過剩生產物が生ずるのは、その共產體自體の生產力の發展に由來するものとして內部的必然的である。然しその過剩生產物を何時何處で他の外部の共產體と交換するに至つたかは全く偶然的である。然しこの偶然的な共產體間の外部的交換が或る程度回數を重ねると、やがてこの外部的な偶然的交換は共產體內部に一般的、必然的交換を惹き起すのである。斯くて偶然性と必然性とは對立物の統一として、眞に辯證法的關係にあるのである。（註）

（註）偶然性と必然性の差異は單に內部的原因と外部的原因とにこれを求むるにとどまらず、更に前者は個別的、後者は一般的なる差異も存す。この點は他日論ず。

以上に於て吾々は、對象の現象形態を取扱ふ場合、（一）何故對象の量的規定性を研究する必要があるかの理由と、（二）その量的規定性を研究するに當つては常にその對象の質的規定性を同時に顧慮す可きこと、並に（三）これを看過する時は機械論的誤謬に陸入ることを述べた。今これ等のことを經濟學方法論の問題に移して考へて見よう。

（一）の經濟現象の量的規定性を研究することを必要とする理由は、既に述べた所より明かなる如く、主として二つある。第一の理由は、經濟現象は總てそれ自體量的規定性を有するからである。例へば生產現象（賃銀勞働、資本等）にしても、交換現象（價格、需要、供給等）にしても、更に分配現象（賃銀、利潤、利子、地代等）にしても、總て量的規定性を有し、而もその量的規定性は對象そのもの、即ち客觀的實在の一規定をなしてゐるからである。それ故、吾々が經濟現象の研究に際し、量的規定性を取扱ふのは、多くの經濟學者の主張する如く、單に說明、理解を容易ならしめる爲の便宜的手段にとどまるのではない。寧ろ對象そのものゝ斯かる規定性からして、吾々は直接感性に訴へるか、乃至は間接に經濟統計を利用し、多くの事實的材料を蒐集し、その量的規定性を觀察し、これ等事

實的材料の基礎の上に「反省的思惟」によつて法則、從つて經濟理論を構成することが要求される。表面マルクスが「資本論」の研究に於て採つた方法は、純演繹的であり、後で説明、理解の便宜的手段として數字を取扱つて居るに過ぎぬやうに見えるが、事實に於ては、具體的抽象に出發し、歸納法と演繹法の辯證法的統一（拙稿、「辯證法の基本的特徴と體系とに就いて」三田學會雜誌、二六卷六號、一〇〇―一〇一頁參照）を要求する所のマルクス的方法は、尤大なる事實的材料の量的觀察を研究の出發點としてゐる。即ち、マルクスは「資本論」第二版の序文中で、次の如く明言してゐる。「勿論説明方法は、形式的には、研究方法と區別されねばならない。研究は材料を詳細に占有し、その材料の種々なる發展諸形態を分析し、これ等諸形態の内的紐帶を探し出さねばならない。この仕事が完成した後、はじめて現實の運動は適應的に説明され得る。かゝる説明が成し遂げられ、今や材料の生命が觀念的に反映することになれば、それは吾々が先驗的構成（註、純演繹的方法）で事を濟ましたものなるかに、見えもするだらう」と。（Das Kapital, hrsg. v. Engels. Bd. I. S. XVII. 河上、宮川氏譯、第一分冊、三〇頁）さればブルジョア批評家オッペンハイマー――恐らく彼はブルジョア經濟學者の最高峯に立ち、又マルクス經濟學への著しき接近を示して居るとは云へ――がマルクスの方法を次の如く特徴づけて居るのは全く誤つてゐる。「マルクスは本來の證明の爲に原則として演繹的方法のみを用ひる。……彼が數を用ひる場合、彼はそれを單に説明として用ひるが、決して證明として用ひない。その特徴を示すことゝしては、屢々最も重要な統計的事實が註として線の下（註、頁の下）に追ひやられてゐる。」と。（F. Oppenheimer, Das Grundgesetz der Marxschen Gesellschaftslehre. S. 47-48）

經濟現象の量的規定性を研究する第二の理由は、經濟現象の量的規定性の變化が直ちにその質を變化せしめないとは云へ、一定の限界に達すると質的變化を惹き起すものなるが故、對象變化の可能性を含むものとして、常に量的規定性に注意す可きであるからである。例へば、吾々は各種産業部門に於ける資本蓄積の量的增大に絶へず注意す可きである。然る場合にのみ、資本主義の自由競爭の時代から獨占の時代への質的變化の可能性を認識し得るのであり、從つて更に進んでは、資本主義の一定段階としての獨占資本主義の種々な特殊的規定性を認識するに至る可能性が與へられるのである。

次に（二）の問題、即ち經濟現象の量的規定性を研究するに當つては常にその現象の質的規定性を同時に顧慮す可き點を述べよう。蓋し吾々が經濟現象の量的規定性を研究するに當つては、一々直接感性に訴へて觀察することは出來ぬからして、多くの場合には統計數字を利用しなければならぬ。從つてこの（二）の問題は主として統計數字の取扱に關する問題となる。既にヘーゲルが「統計に於ても亦、吾々が取扱ふ所の數はそれによつて規定された質的成果からしてのみ關心を持つ。茲に與へられた指導的見地を缺いた斯かる單なる數の寄せ集めは、これに反して、理論的關心も實踐的關心も滿し得ざる所の空虛な好奇心として當然妥當する」（Encyclopädie § 106. Zusatz. S. 215. 邦譯、二六七頁）と述べて居る如く、統計數字を取扱ふに當つては、常に特定の質によつて規定された特定の量的規定性として取扱ふ可きであり、然らずして單に量的規定性にのみ囚はれるならば、現實の客觀的實在の量的規定を正しく表象することは出來ず、爲に理論的關心も實踐的關心も滿し得なくなる。例へば、ブルジョア的統計は屢々數に數を積み重ねるにとゞまり、現實を明かにしないのみならず、それを蔽ひかくし歪めてゐる。人口を調査して平均數を擧げるだけでは、國内の階級的關係を全く反映することは出來ぬ。レーニンは幾度となく、數のみを追ひ、對象の質を輕視する所の統計の誤謬を指摘してゐる。「數字の列を追うてゐては、經濟の社會經濟的タイプ（大主人たるブルジョア、中主人、半プロレタリア、プロレタリア）が、屢々見逃がされないだらうか？　この危險

性は統計的材料の特性に於て非常に大きなものである。數字の列に魂を奪はれてゐる人がある。私は著者に對してこの危險性を考慮に入れることを注告したい。筆者は、斯くて材料の生きたマルクス主義的內容を無條件的に塞いでゐる、階級闘爭が數字の列の中に溶かされてゐる」と。（レーニンのベー・エヌ・クニポーヴィッチへの手紙）吾々はレーニンと共に、總ての質的區別を無にして終ふ種々なる種類の「平均數」によつて判斷する態度と戰かはなければならぬ。例へば一國に於ける投資額の平均的な一般的數字を研究するだけでは、國內の工業化過程の眞の表象を得ることは全く出來ない。それ等數字に隱された質的差異を明かにし、從つて產業の各部門即ち重工業と輕工業、生產手段の生產と消費手段の生產等々の領域に於て事態がどうなつて居るかを知らなければならぬ。

次いで吾々は(三)の問題、即ち經濟現象の量的規定性を取扱ふ際、その質的規定性を看過する時は、機械論的誤謬に墜入ることを述べよう。既に論じた如く、自然科學に於て數學竝に力學が最も正確科學なる事實よりして、夫々の科學を正確ならしめんが爲に、その取扱ふ對象の質的特性を抹殺し、之を力學的現象に環元し、以つて純數學的方法に訴へんとする結果、機械的誤謬に墜入るのである。經濟學に於て正にこの轍を踏んだものこそ數理經濟學の方法論である。以下に於て吾々は、先づ數理經濟學の方法論の本質を研討し、次いでそれが機械論的であり、從つて先に指摘して置いた種々の機械論的誤謬に墜入らざるを得ぬことを述べよう。

蓋し數理經濟學はこれを廣狹兩義に解し得る。廣義に於ける數理經濟學とは數學的表現を用ひる經濟理論であり、それは叙述を簡明にし、理解を精緻ならしめる爲の便宜的手段として數學的表現を用ひるにとどまる。斯かる意味の數理經濟學に屬する者としては、ジェヴオンズの指摘する所に據れば（cf. W. S. Jevons: The Theory of Political Economy. 3ed. 1888. p. xxiii-xxiv）、彼以前には Rau, Hagen, J. S. Mill, Courcelle-Seneuil, Cournot, Whewell, Esmenard du Mazet, Du Mesnil-Marigny 等があり、又彼以後に於ては Marshall, Pigou, Cassel, Amonn 等がある。然し狹義の嚴密な意味に於ての數理經濟學とは、純粹經濟學の對象をば靜態的に考へられた所の經濟的諸量の函數關係即ち均衡狀態にあるとなし、從つて斯かる對象は數學的方法を以つてのみ理解し得るとなすものである。部分均衡の理論を取扱つた者としては、Cournot, E. J. Dupuit, Gossen, Jevons があり、一般均衡の理論を取扱つた者としては、ローザンヌ學派の人々（L. Warlas, Pareto, Barone, Pantaleoni, Pierri-Tonelli）及び米國の I. Fisher 獨逸の Schumpeter 等がある。吾々が今批判の對象とする所のものは、後者の嚴密な意味に於ける數理經濟學の方法論である。

彼等は經濟學を正確科學たらしめんとして、先づ種々な要素（經濟的、法律的、政治的、倫理的諸要素）が不可分の統一をなしてゐる社會現象中から、純經濟要素のみを抽象し來り、これをのみ對象とするところの所謂「純粹經濟學」を確立せんとす。更にこの純粹經濟學を出來得る限り正確なものたらしめる爲に、自然科學中最も正確科學とされてゐる所の數學竝に力學に近似せしめんとする。然らば純粹經濟學の數學化乃至力學化は如何にして可能なるか。

彼等の主張する所に據れば、第一に、純粹經濟學の對象は量的であり、從つてその方法は數學的でなければならぬと。ジェヴオンズは卒直に次のやうに述べてゐる。「斯學（註、經濟學）は富、效用、價値、需要、供給、資本、利子、勞働等の一般的觀念並に日常產業經營に屬するその他の凡ゆる量的觀念に種々なる算法を適用するにある。殆んど凡ゆる他の科學の完全な理論はその算法の使用を含む如く、吾々もその援助なしには眞の經濟學理論を持ち得ない。私には、斯學が明かに量を取扱ふものなるが故に、それは數學的でなければならぬと思はれる。」と。（ibid. p. 3）

レオン・ワルラスは更に明確に右の論據を基礎づけてゐる。彼は經濟學の對象を社會財なりとし、この社會財を次の三性質に分つ。（一）占有せられる性質、（二）價値を有し、且つ交換し得られる性質、（三）産業的に生産し得る性質とである。而して（一）の性質は私有財産の法制論の對象であり、（三）の性質は産業制度乃至生産技術の研究に屬し、これ等の性質から純粋に抽象された社會財の（二）の性質、即ち交換價値乃至價格のみが純粋經濟學の對象をなすと。且つ交換價値は財の交換比率即ち量的關係なるが故に、これを對象とする科學は當然數學的でなければならぬと。（Walras, Éléments d'économie politique pure. 序文及び第一篇「經濟學の對象及び分科」を參照）この理路整然たるワルラスの論據は、多少の修正は受けたとは云へ、尚ほ今日に於て大體數理經濟學の踏襲する所であり、數理經濟學の大成者パレート（Vgl. Pareto, Anwendung der Mathematik auf Nationalökonomie）も、又シュムペーターも同一論據に立つ。例へば、シュムペーターの如きは「それ等の（註、經濟學の）概念が量的なるが故に、斯學の原理は數學的である」と斷言してゐる。（Über die mathematische Methode der theoretischen Ökonomie. Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik u. Verwaltung. 1906, S. 35）

純粋經濟學の數學化乃至力學化を可能なりとする第二の且つ根本的な論據は、その對象が單に量的であるばかりでなく、經濟的諸量の間には相關的關係即ち函數的關係が存し、一つの經濟量の變動は同時に他の凡ゆる經濟量の變動を伴ふのであり、而もその變動の方向は本質上相反的なるが故に、恰も力學に於て相反的な力が均衡狀態に達する傾向ある如く、經濟的諸量の變動も本來均衡狀態に達する傾向を有し、純粋經濟學は正にこの力學的現象たる經濟的諸量の均衡狀態を對象とするものなるが故に、力學に於ける如く數學的方法に據らざるを得ぬと。この第二の論據を最も明確に基礎づけたものはシュムペーターである。それ故以下に於て、主として彼の所說（Vgl. Schumpeter, Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie, 1908）に從つて、右の論據を叙述する。

彼は純粋經濟學乃至正確經濟學を樹立する爲に、凡ゆる非經濟的要素を抽象し去り、次の如きものを純經濟的要素であり、從つて純粋經濟學の對象であるとなしてゐる。即ち「經濟の具體的形態竝に他の事情が假令へ如何なるものであるにせよ、常に至る處に於て、財の量の制限が經濟行爲に課する所の一定の諸必然性を記述し、それ等の諸結果を導き出すにある」と。（Ebenda, S. 240）斯かる對象を取扱ふ所の彼の純粋經濟學の體系を構成する爲に、彼は先づ次の如き根本的事實から出發する。即ち如何なる時代、如何なる國民の經濟に於ても、各人は各々一定量の財を所有し、且つこれ等の財の分量は互に獨立の大さではなく、互に相關的關係に立ち、一つの體系を構成してゐると。（Vgl. Ebenda. S. 28）換言すれば、一の財の分量の變動が時間的に先に行はれ、これが原因となつて他の財の分量の變動を結果として惹き起すが如き一方的規定的な因果關係に立つのではなく、一の量の變動が他の一切の諸量にその影響を及ぼすと同時に、逆に他の一切の諸量に於ける變動が何等かの形に於てこの一要素に影響するが如き關係に立つのであり、數學的表現を借りれば、函數的關係に立つのであると。從つて純粋經濟學は、國民經濟の一定狀態に於ける一定の相互依存的關係即ち函數的關係のみを說明す可きであると。（Vgl. Ebenda. S. 34）斯く對象が函數的關係なる以上、最早普通の因果法則を以つて說明し得ず、高等數學の方法を用ひざるを得ないことになる。

然るに斯かる相關的乃至函數的關係にある經濟的諸量は、現實に於ては、常に全體として流動してゐる。この流動しつゝあるものを理解する所の學問上の手段は、先づそれを靜止即ち均衡の狀態に於て把へ、その際に於ける經濟的諸量の相關的關係を明かならしむ可きであり、これが均衡理論であると。斯く流動して止まざる現象を理解す

る第一の論理的手段としてこれを靜止狀態に於て把ふ可きであるとしても、若し現實の相關的關係が本質上斯かる狀態を假定することを許さゞるものであるならば、均衡理論の描く世界は現實に全く適合しないことになる。然るに彼に據れば、現實の經濟現象は、假令不斷に流動すると雖も、事實絶へず均衡狀態への傾向を示すものであると。何となれば、經濟的諸量の一般的相關關係を詳細に觀察するならば、そこに起る變動は屢々相反的な方向をとるからであると。例へば價格を中心として需要量と供給量とは相反的な方向に變動す。斯く經濟的諸量間の相關關係が相反的方向を有する以上、それは本質に於て力學的現象と何等變る所のなく、丁度力學に於て相反的方向に作用する力が均衡狀態を惹き起す如く、この相關關係にある體系も新なる攪亂原因の發生せざる限り、常に均衡狀態への運動として理解し得ると。例へば先に擧げた例に從へば、結局に於て價格に何等變動を來さざる需要と供給との關係が成立し、又需要と供給に何等の變動を齎さゞる所の價格が成立せざるを得ぬと。

斯くて經濟的諸量の相關關係を對象とする所の純粹經濟學の內容は均衡理論であることになる。この均衡理論は本質上力學に於けるそれと異る所なきが故に、經濟的均衡理論をば正確科學たる力學のそれに近づけ、以つて力學に於ける如く數學的方法を適用せんが爲に、更にその研究對象たる相關關係の體系を改造しなければならない。即ち數學的方法を適用する際には、その對象が質的に等しく、爲に量的に取扱ひ得るものでなければならぬ。それ故彼は、經濟的諸量の體系を構成する一切の要素の質的差異を抹消し、第一に一切の要素は等しく財であり、又第二に諸要素間の一切の關係は交換であると考へる。從つて彼は、財の概念を著しく廣義に解し、本來の消費財、生產財は元より、勞働及び土地の用役をも財概念中に包括す。又交換の概念を不當に擴大し、非交換經濟即ち自給自足の自然經濟に於ける財と財との關係をも交換と解してゐる。そして斯かる意味の交換關係に於ける財の量的相關關係を記述することが純粹經濟學の對象と考へる。

更に彼は、丁度力學に於て均衡狀態を正確に、研究する爲に外部からの一切の攪亂原因なきものと假定する如く、經濟的均衡の理論を正確に研究する爲に、その均衡を新に攪亂する一切の變動を研究の範圍から排除し、全然これなきものと假定す。これ所謂靜態の假設である。靜態の假設は二つの條件から成立つ。第一の條件は人口が一定不變なること、即ち人口が總數に於て又その構成に於て一定であり、從つて又これ等の人口が有する欲望が一定なることであり、第二の條件は、この人口によつて利用せられつゝある財の量が一定なること、即ち財がその總量に於て、その分配の形態に於て更にその利用方法に於て一定なることである。この三つの根本的條件を更に具體的に列擧すれば、（一）人口の變動なきこと、（二）需要の變動なきこと、（三）財の存在量の一定なること、（四）生產組織の一定なること、（五）生產技術の一定なることである。

さて以上述べた所よりして、數理經濟學者が經濟學を正確科學たらしめる爲に、それを數學化乃至力學化することを可能なりとする論據が明かになつたと思ふ。それと同時に、その方法論が全く機械論的であることも理解されたと思ふ。何となれば、その方法論は先に指摘して置いた機械論の二つの基本的特徵を端的に現はしてゐるからである。

機械論の第一の基本的特徵は、凡ゆる物質の運動形態、即ち自然、社會、思惟等の運動形態を力學的運動形態と同一視する點にあるのだが、數理經濟學者もその研究對象を均衡理論にあるとなすことにより、經濟現象を本質に於て力學的現象に一致すと看做してゐる。この傾向は單に吾々の引用したジュムペーターに限るのではなく、總ての數理經濟學者に見る所であり、ジェヴオンズの如きは、明かに經濟學を「效用及び自利の力學」（Jevons, Theory of

Political Economy. p. 21）と名付けてゐる。

機械論の第二の基本的特徴は、各運動形態に於ける物質の質的差異を純量的差異に、即ち全然一様な微分子の量的結合に還元する點にある如く、數理經濟學者も各種の經濟現象の質的差異を抹殺し、同一質のもの、即ち財並に交換關係に還元し、交換關係に於ける財の量の相關關係のみをその研究對象とする。この傾向は勿論獨りシュムペーターに限つたものではなく、一般に數理經濟學者か交換價値を中心問題とし、それから得られた交換の法則によつて、總ての經濟現象、即ち生産、分配の現象をも等しく説明せんとする事實よりして、右の傾向の共通なることを推知し得る。

斯くの如く數理經濟學の研究方法は機械論的なるが爲め、必然的にその研究の所産も先に指摘して置いた所の種々の機械論的誤謬を曝露せざるを得なかつた。

第一、抽象的、一面的認識に墜入る。と云ふのは、現實の經濟現象は質と量の統一であり、特定の質によつて規定された特定の量的規定性として存するが故に、その對象の質的規定性を抹殺し、專ら純量的に對象を研究するならば、當然現實の經濟現象を認識し得ないからである。

先づ抽象的認識に墜入る點から述べよう。蓋し數理經濟學者は、經濟學を純粋乃至正確科學、從つて數學化乃至力學化さんとして、その對象を專ら量的に取扱ひ得んが爲に、それの質的規定性を抽象する。例へばシュムペーターの如きは、本來一定の歴史的社會組織（古代社會、封建社會、資本主義社會等）の特定の質によつて規定された經濟現象からその特定の質を抽象し去つて、如何なる時代、如何なる社會經濟に於ても共通に存する事實、即ち各人は各一定量の財を所有すると云ふ事實から出發し、それ等財の量の相關關係を研究せんとする。斯かる經濟學の研究が余りに抽象に失せはせぬかとの疑惑は何人も容易に起す所であり、又事實從來數理經濟學に對して斯かる非難が加へられてゐた。從つて又數理經濟學者の側よりしても、斯かる非難に對する辯護論が豫め用意されてゐる。例へば、吾國に於ける數理經濟學者中山伊知郎氏の如きは次のやうに辯護してゐる。「數理經濟學に對する疑惑の中に就いてもその描くところの世界があまりに現實に遠き（註、抽象的）に非ずやとするところの疑惑は最も重要なる問題の一を構成して居る。然し乍ら如上の行論を一度び通過せられた讀者にとつてはこの問題は數理經濟學に特殊のものに非す、理論經濟學一般、特に純粋經濟學の本質に屬するものなることを看取すること極めて容易であるに相違ない。あらゆる理論はその理論たる點に於て既に何等かの理想化（註、抽象化）を經たものである。故にその描くところの公式が現實に遠い（註、抽象的だ）と云ふことは決して直ちにその理論の否定を意味するものではない。要はこの公式のものたらす結果が現實に適合する程度の如何にあるのみ。而してこの程度の大小は明に理論の價値を定めるものであるけれども、それは公式自體の非現實性から任意に想像することを許されないものである。」と。（中山氏著「數理經濟學方法論」改造社經濟學全集五卷、三八―三九頁）

氏の云はんとする所は、數理經濟學は理論經濟學であり、法則を設定することを課題とするものであり、從つて本來一般性を有す可き法則を設定するには個々の特殊な具體的現實から或る程度の抽象をなすは止むを得ざる所であり、殊に均衡理論の如きは直接現實の問題を解決するのではなく、專ら一般的な思考の用具として存する（同書、二三五頁、及び同氏著「經濟均衡理論の本質と價格勢力學説」東京商大研究年報、「經濟學研究」一號、九三―九六頁參照）以上は尚ほ更のことであり、要はこの抽象的な法則乃至公式が現實に適合する結果を齎すか否かに掛つて居ると云ふのである。なるほど氏の主張する如く、理論を構成する場合或る程度の抽象をなさねばならぬことは確かで

ある。だが問題はその抽象の程度如何に掛つてゐる。他の機會に述べた如く、抽象には限界があるのであつて、問題とする對象の根本的質、即ちそれなくしては最早對象そのものが存し得ざる所の質迄に抽象をとゞむ可きであり（所謂「具體的抽象」）、若しこの限界以上に抽象の程度を押進めるならば、斯かる抽象に基いて構成された理論は最早その結果に於て現實の對象に適合し得なくなる。然るに數理經濟學者の抽象は明かにこの限界を遙かに越してゐる。何故かなれば、彼等の云ふ如く、理論の價値はその「結果が現實に適合する程度の如何にある」以上、その理論は一定の現實の經濟現象、例へば資本主義社會の經濟現象を説明し得なければならぬ筈であり、それには研究の出發點に於て資本主義社會の根本的質を抽象し去るを許るされないに拘らず、彼等は凡ゆる歴史的社會組織の特定の質を抽象し、超歴史的な前提、例へば各人は各一定量の財を所有すると云ふ單なる前提から出發してゐるからである。それにも拘らず、彼等が敢へて斯かる抽象をなすのは、凡ゆる歴史的社會組織に制約されざる普遍的經濟法則が存すと信じ、先づ所謂純粋經濟學に於てこれを研究し、然る後この法則によつて容易に現實の經濟現象、即ち一定の歴史的社會組織の質によつて制約されてのみ存する現實の經濟現象を説明し得ると信じてゐるからである。然し經濟法則は本來社會法則であり、常に歴史的であり、可變的である。又凡ゆる社會組織の質を抽象し去つた所の經濟法則から一定の社會組織の質によつて制約された經濟現象を説明せんとの企は、丁度凡ゆる質から全く抽象された「純粋有」から一定の質に制約され、從つて可變的な「定有」を導き出した所の神秘的なヘーゲルの方法と何等異なる所がない。（拙稿前號の論文を參照せられたし）この點に於て、恐らくディールがシュムペーターに加へた反駁は總ての數理經濟學者が甘受しなければならぬであらう。即ち、「總ての組織即ち總ての空間上、時間上の一定基礎から無關係であり、そして單に財の量と經濟主觀との量的關係のみを説明するにとゞまり、且つ自動的に明かにされるような純粋經濟學が吾々に何を意味する筈だらうか。交換なき經濟にも交換經濟にも等しく妥當するような經濟法則が吾々にどんな役に立つ筈だらうか。正に嚴密な方法と論理の立場から要請される可き所の嚴格主義は、結局人々がシュムペーター流に純粋理論を企てる場合何處に到達するかを示すに至つた。即ちそれ等の前提を承認する人々は何人もその絶對的正しさを否定しないような諸命題に達するのである。だが、そして決定的なことは、それ等の前提が余りに狭きに失して、何等經濟關係の理解に役立つような結果に達する筈がないと云ふことである。」と。（K. Diehl, Theoretische Nationalökonomie. Bd. I. S. 311）ザーリン（Edgar Salin）も亦「シュムペーターの正確性がこの際余りに現實から乖離する爲に、彼の經濟學は主要な點に於て何事も語らず、何事も説明し得ない」と。（Vgl. Hans Honegger, Volkswirtschaftliche Systeme der Gegenwart. S. 8）

右の如く何等現實の經濟現象を説明し得ざる所の余りに抽象的な認識に墜入るばかりでなく、同時に一面的な認識にも墜入らざるを得ない。換言すれば、その取扱ふ所の對象が余りに狭きに失せざるを得ない。例へば、シュムペーターは經濟現象を專ら量的に取扱はんとして、その對象を交換關係に於ける財の量の相關關係に限り、相關關係を均衡狀態に於て正確に研究する爲に靜態の假設をなし、この靜態學に純粋經濟學を限定してゐる。然るに總ての經濟現象は絶へず發展の流れに於てあるが爲に、彼は自己の經濟學體系を靜態學と動態學とに區分せざるを得なくなつたし、又純粋經濟學としての靜態學の研究對象を余りに狭く限定せざるを得なかつた。それ故彼は靜態學に於ては、（Vgl. Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie.）價格論と、その價格論の適用として分配論中賃銀（彼によれば勞働用役の價格）と地代（土地用役の價格）とを論ずるにとゞまり、利子と企業家利潤とは本來動態的現象の故を以つて研究の範圍から排除しなければならなかつた。結局彼に殘された主要問題は價

格論のみであり、そして事實彼は全純粹經濟學を交換關係に歸さうとしてゐる。然し交換關係に斯かる一般的意義を與へるが爲には、彼は何等交換關係の存さゞる場合にも、それが存する場合と全く同樣に經濟が營なまれるとの不合理を冒さゞるを得ない。

第二、主觀的な勝手氣儘な認識をなすに至る。蓋し數學は、一般に特にカント主義者にとつては、思惟の先驗的原理に從つて構成された最も根本的な一般命題、即ち公理の體系を掲げ、之より總ての特殊複雜なる關係を演繹するものと解されてゐる。（唯物論者は後天的歷史的構成を認めるのだが、Vgl. Engels, Herrn Eugen Dühring Umwälzung der Wissenschaft. S. 24-28. マルクス全集一二卷、二二四―二二七頁參照）此の意味に於て數學的方法は純演繹的とされてゐる。斯かる純演繹的な數學的方法によつて經濟現象を研究する時は、往々にして客觀的實在としての經濟現象から遊離し、主觀的な勝手氣儘な數量の遊戲に墜入り易いのである。されば、シュムペーターに對して、ディールが次の如き評言を加へざるを得なかつたのも當然であらう。「總ては結局多數の算術の例題に歸される。それ等は確かに正しく解かれ得るが、現實の說明の爲に吾々に役立ちはしない。吾人は屢、恰も將棋の手を解くことが問題とされてゐるが、經濟問題を解くことは問題とされてゐないかのような印象を受ける。」と。（Diehl, Theoretische Nationalökonomie. Bd. I. S. 312.）更に數理經濟學者の方法が純演繹的であり、客觀的認識に達し得ざることは、彼等の多く（ゴッセン、ジェヴォンズ、ワルラス等）が「限界效用均等の法則」から出發し、それから純演繹的に價格現象にとゞまらず、生產、分配等の一切の現象を說明せんとする企てから明かである。

第三、複雜なものを簡單なものに還元せんとする所の非科學的方法を採用す。蓋し物質の位置變化なる力學的運動は、勿論より複雜な物理學的、化學的、生物學的運動の內に等しく含まれてゐるばかりでなく、更に自然現象にとゞまらず、或る意味に於て、社會現象にも含まれてゐる。それだからと云つて、より複雜な諸現象を簡單な力學的現象に還元して研究することは許されない。物理學、化學、生物學にしても、又自然科學に對する社會科學にしても、先づ夫々の現象が他の現象と異なる根本的質を獲へ來つて、それから研究を始めなければならぬ。之に反して、若しも數理經濟學者の如く、經濟現象を本質に於て力學的現象と同一なものであるとするならば、經濟現象が經濟現象たり得る根本的質、即ち社會現象としての質が失はれて終ふ。斯かる非難に對し、數理經濟學者は次のように答へる。「然し乍ら以上の一切の非難は純粹經濟學の本質を悟らざる點に於て根本的の缺點を有する。純粹經濟學はかゝる經濟現象をばそのまゝに科學の認識對象とするものに非ず、それは既に述べたるが如き一定の假定に基いて理想化せられ孤立化せられたる現象を對象とするものである。純粹經濟學はこの意味に於て孤立化せられたる社會科學の一部門（果して然るか？）にすぎず……。否な吾々の見るところに從へばかく孤立化せられたる純粹經濟學の內容はそれが均衡理論を中心とする限りむしろ極めて良好なる數學適用の場面を構成するのである」と。（中山伊知郎氏「數理經濟學方法論」五八―五九頁）氏の云はんとする所は、純粹經濟學は經濟現象を他の社會現象から抽象し、純粹に研究せんとするものであり、それは經濟學に獨立性を與へるものであり、それには均衡理論を中心問題とす可く、從つて數學的方法を適用す可しと云ふにある。然し數理經濟學者が經濟學に獨立性を與へんとして行つた抽象は、反つて社會現象としての經濟現象の根本的質迄も抽象し去つたが爲に、經濟學の獨立性を奪ふ結果に墜入つて終つたのである。

第四、質的差異を無視す。蓋し數理經濟學者は、一定の歷史的社會組織に制約されざる普遍的經濟現象を純粹經濟學の對象とし、從つて經濟現象が一定の歷史的社會組織から受ける特定の質を無視する。單にそれにとゞまらず、

更に種々の經濟現象、例へば賃銀、利子、地代等の相互の質的差異をも無視する。ジェヴオンズ、ワルラス、或はシュムペーターにしても、彼等數理經濟學者は等しく價格論を中心問題とし、生産物の價格を率する法則を研究するばかりでなく、その法則によつて、等しく生産要素が分配に際して受ける所の賃銀、利子、地代の經濟現象を一率に説明せんとする。その結果、それ等の現象の質的差異に就いては何等説明されずに終つてゐる。

さて彼等は、一定の歴史的社會組織から受ける特定の質を排除した所の普遍的な經濟現象を純粋經濟學の對象だとしてゐるが、その實かゝる特定の質を排除し得なかつた。と云ふのは、彼等は等しく交換關係を中心問題として居り、特にシュムペーターの如きは一切の經濟關係を交換關係に歸して居るが、斯く交換關係に一般性を附與することは事實最も交換關係の發達した資本主義社會を前提して居ることに外ならない。彼等は丁度、古典派經濟學者が普遍的經濟法則を設定せんが爲に、超歴史的な前提として假定した所の自利的衝動により自由に活動する個人が、事實に於ては近代のブルジョア的社會の所産であることに氣附かなかつたのと同じである。(Vgl. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. hrsg, v. Kautsky. S. XIII-XIV.)經濟學は常に歴史科學であり、一定の歴史的社會組織の質を前提するものであり、これを無視して、超歴史的科學として建設せんとの試みは、常に挫折し、知らざる內に歴史的枠の中に追ひ戻されざるを得ないのである。

第五、量から質への轉化を否定し、從つて漸次的發展の中斷、即ち飛躍を否定する。彼等は專ら經濟的均衡狀態の量的方面をのみ觀察し、質的方面を問題外に置く結果、彼等にとつて一つの均衡狀態の他の均衡狀態への發展は、單に量の增減による漸次的發展と解されるにとゞまり、量の增減が一定限界に達するとその漸次的發展が中斷され、突然にその質を異にする他の均衡狀態へ飛躍することを理解しない。即ち彼等は平凡な進化論の立場にある。その結界或る均衡狀態の量的增減が一定限界に達するや、突如として起る均衡狀態の攪亂即ち恐慌現象を例外的現象と看做さゞるを得なくなり、この恐慌の理論を有機的にその理論體系中に攝取し得ない。例へばシュムペーターの如きは、均衡理論を中心とする所の彼の純粋經濟學の體系を取扱つた彼の著書、"Dss Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie. 1908" に於ては何等恐慌現象を對象の內に包攝してゐず、唯、動態理論を取扱つた所の "Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. 1912." の卷末に於てこれを對象としてゐるにとゞまる。斯かることは決して獨りシュムペーターに限つては居らず、一般均衡理論を經濟學の對象とする總ての經濟學者に於て見る所であり、從つて中山氏の如きは、次の如く告白せざるを得なかつた。「而して均衡理論の最も純粋なる形態として今日の發達を見たる一般均衡理論についてもこの點(恐慌理論を有機的に攝取する余地なきこと)は尙同樣に云ひ得るところである。換言すれば吾々は茲でその本質に於て靜態的なる均衡理論の認識の極限につきあたる。」と。(上掲書、二四一頁)又最近に於てブスケ教授もこの點をロオザンヌ經濟學の限界と感じ、均衡狀態の諸要素の量的發展が均衡の質的變化を來すことを研究せんとしてゐる。(G.-H. Bousquet, Les Bases du Système Économique. Paris 1932. に關する小高氏紹介論文參照、三田學會雜誌昭和七・七)

斯く質を研究の範圍外に置き、爲に量から質への轉化、飛躍、從つて恐慌理論をその理論體系中に攝取し得ざる經濟學が、果して幾莫の理論的價値を有するやは頗る疑問であらう。

第六、經濟現象の變動の原因を外部からの影響に求め、從つて對立物の統一としての經濟現象の自己運動を研究の範圍外に置かざるを得ない。蓋し數理經濟學者は、その研究對象たる經濟的均衡の理論をば力學に於ける均衡理論の典型に近づける爲に、丁度力學が物體の位置變化を全く外部からの力の作用として研究する如く、經濟的均衡

の變動を外部的與件（例、人口、地理的環境、社會組織、生産技術等）の影響によるものとして研究してゐる。シュンペーターの如きは、明かに次の如く述べてゐる。「力學の諸法則は、重き諸物體が何等かの力の影響によつて如何に運動するかを吾々に語るが、別にこの後者（註、力）の本質は研究せず、そして力學は、斯かる力が何等外部からそれ等に作用しない場合には、正に何の運動もなく、又何等新たな力學的性質の現象を生み出さざることから出發する如く、純粋經濟學も、外部から與へられた條件の影響によつて經濟が如何に構成されるか、そして斯かる條件の外部から來る變動に對して如何に經濟は順應するかに就いて形式的法則を吾々に與へるのであり、從つて事實純粋經濟學は斯かる見解よりして『經濟の内的發展』を正に抽象するのである。」と。（Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. S. 470-471）斯くて數理經濟學者は、純粋經濟學の對象を經濟的均衡理論に限り、それを力學化せんとする限り、對立物の統一（生産力と生産關係との矛盾的統一）による經濟現象の自己發展は研究されず、それが爲に一方に於て、經濟學を獨立科學たらしめんとする彼等の企圖は、却つて反對の結果を來すし、他方に於て、吾々の實踐にとつて最も必要な經濟現象の自己發展の法則を研究せざる所のその理論體系は、實踐に對し最も少き、否なる全く寄與する所なき理論とならざるを得ぬ。

以上に於て、數理經濟學の機械論的誤謬の指摘を終ると共に、量の範疇に關する項を結ぶ。「質量」の範疇の研究は次の機會に讓る。

英國自由主義の終焉

濱田恒一

十月二十日附東京朝日新聞夕刊は「特惠關稅にたより自由貿易を解消」と題して、オッタワ會議の結果、各地に於いて行はれたる關稅の引上げを論じてゐる。一ケ月前の讀賣新聞は「擧國一致內閣の分裂を賭して、傳統の自由貿易主義を放棄し」云々と論じた。英國の保護主義傾向は決して最近の事ではないが、併し保護主義は從來選擧戰では不利な主義であつた「傳統の自由主義は深く根ざしてゐた。併し近時の英國殊に大戰後の英國經濟の客觀的事實は、既に自由主義に不適合なものとなつてゐた。屢、見る如く、其處でも事實はイデオロギーに先行した。やがてイデオロギーもその背景の變化に適合せざるを得なくなつた。併し最初の自由主義國は亦最後の自由主義國でもあつた。一九三〇年の關稅平和會議に於いて、關稅平和を唱ける各國の中、肚の中でも左樣に冀つてゐたものは、英國だけだつた。併しその英國も、自己の欲すると否とに拘らず、事實は既に保護主義の國となつてゐた。此の一文は、自由主義の宗家たる英國が、自由黨の沒落に見る如く、輓近に至つて、遂に永年の傳統を放棄して保護主義へ轉向し、世界關稅障壁の一部を形成するに至れる徑路を、概說することを目的とする。論述の順序として自由主義の勃興を要說しやう。

近世的なる生活自由は中世的社會組織の崩壞に始る。その頂點をなすものは、アダム・スミスの自由主義が最も